

育児期フルタイム就労女性の育児への態度・感情

上智短期大学 小坂 千秋
文京学院大学 柏木 恵子

The attitude and feelings of childrearing in full-time working mothers of young children

Sophia Junior College KOSAKA, Chiaki
Bunkyo Gakuin University KASHIWAGI, Keiko

フルタイム就労の母親の育児への態度や育児への感情について、母親自身の属性や家族に関する心理的要因との関連を検討した。その結果、育児への否定的な態度については、学歴による差異や夫婦の親との距離による差異が育児への態度に関連していることが示された。さらに家族に関する要因の分析をしたところ、夫や夫の親から就労について反対されている女性は、賛成されている女性に比べ、育児への肯定的な感情が有意に低く、否定的な感情が高い傾向が示された。また、幼い頃の実母の就労への評価と現在の就労形態に葛藤を抱えやすい女性は、葛藤を抱えにくい女性よりも育児への肯定的な感情が有意に低く、否定的な感情が高い傾向が示された。本研究の結果から、フルタイム就労女性の子育てには、夫や夫の親からのサポートの重要性和実母の就労に対する葛藤が関連していることが示された。

【キー・ワード】 母親，フルタイム就労，育児への態度・感情，幼児

The purpose of this investigation was to examine the relationship between the attitude and feelings of childrearing and demographic variables (educational background; income level; which parents live closely). The results suggested that negative childrearing attitude of the mothers in full-time job was related to the educational background and which parents of the couples live closely. In addition, in the women who were opposed to working from husbands and husband's parents, positive feelings of childrearing were significantly lower and tended to have negative feelings of childrearing, comparing with the women who have supports from them. In the women who have conflict between the appraisal of their mother's working in their childhoods and the current working pattern, positive feelings of childrearing were significantly lower and tended to have negative feelings of childrearing, comparing with the women who don't have it.

【Key Words】 Mother, Full-time job, Attitude and feelings of childrearing, young children

問題と目的

現在の日本では、結婚・出産を経験しても働き続けている女性の比率は増加傾向にあり、子どもが幼いうちに再就労する女性も増加しているなど(厚生労働省 2004), 子育てをしながら働く女性は増加傾向にある。さらに企業や自治体からも、女性が就労を継続できるようなさまざまな施策が検討されていることもあり、女性の意識の変化や社会経済の変化に伴って、今後、育児期に就労する女性はさらに増加することが予想される。

これまで母親が働くことに関する研究は、主に仕事と家庭を両立することの葛藤として扱われることが多かった。母親が働くことは、父親と比較して顕著に葛藤を抱えやすいことが指摘されているが、その理由の 1 つとして、従来から女性は家庭で家事育児の責任を持つという伝統的家族観が根付いていることが挙げられよう。日本の夫婦においては、就労の有無や収入に関係なく、子育てや家事の大部分の責任は、妻が担っている。女性は、性役割観が変化しているにもかかわらず、従来どおり家事育児もこなさなければならないという状況にあり、働く母親は、仕事と家庭の両立において多くの葛藤を抱えながら子育てをしていることが指摘されている(小泉 2004)。

社会の変化が急速に進む中、子育てに目を向けてみると、少子化や高齢出産の増加など、子育てに対して消極的であったり、子育てを先延ばしにしたりする傾向が見られるようになってきた。最近の母親は、これまでの生活の中で子どもに接する機会が少なく、子どもがどのように育つのか、子育て中はどのような状況になるのかということについて、十分な知識を持たずに出産することも多いため、母親は出産直後の環境の劇的な変化に適応しにくい(氏家 1996)。さらに、子育ては思うようにならないことや、結果が見えないことが多く、これまでの学校や社会生活での経験が役に立たないなど、ストレスを抱えやすい仕事である。したがって子育ては楽しむものというよりも、むしろ辛く大変なものと感じられる傾向にある。

このような社会の変化にともなって、国内ではこの 20 年ほどの間、子育てに対する否定的な側面がクローズアップされ、盛んに研究されるようになった。つまり、育児不安や育児ストレスのような育児への否定的な側面についての研究である。そのような育児への否定的な側面の研究の成果から、専業主婦として育児に専念している状態と精神的不健康感との関連が、数多くの研究の蓄積から示唆されてきた(柏木ら 2003 など)。他方、子育てをしながら就労している女性に焦点を当てた研究は、まだほとんど行われていない。前述のように、育児期に専業主婦であることと育児感情との関連は指摘されているが、育児期に就労している女性の育児感情は、ほとんど注目されていない状況にある。

育児感情に関する研究については、国内においてもかなりの研究の蓄積がみられているが、フルタイム就労、パートタイム就労、専業主婦といった就労形態による差異に焦点が当てられることが多い。就労形態による分析結果においては、一貫して専業主婦の母親が育児への否定的な感情を抱きやすいことを指摘している。他方、働いている母親の中でも特にフルタイム就労の母親は、育児への否定的な感情を抱きにくいことが頻りに指摘されている(柏木ら 2003 など)。子どもへのかかわりが他の時期に比較して強くなるこの時期に、子どもと「べったり」密着しすぎていることが、かえって子育てへの否定的な感情を増幅させ、子育てへの肯定的な感情も持ちにくくなるようである(小坂 2004)。

このように育児感情は、就労形態による差異が見られ、働いている母親は専業主婦に比べて、育児感情が良好であるという結果が示されることが多い。しかし、なぜ有職の母親は、育児感情が良好なのだろうか。伝統的価値観に反して子どもが幼い時期に働くことは、決して周囲から賛同を得やすい状況とはいえない。さらに家庭と仕事とのバランスを取ることは難しく、心理的葛藤も多い（松信 2000）。就労している女性は、専業主婦に比べて緊張感や疲労感を感じやすいことも指摘されている（牧野 1983）。育児期に働く女性が皆、子育てに良好な感情であるとは考えにくい。育児期に就労している母親に焦点を当てて、育児感情の様態がどのように変化するかなどについて扱った研究は、ほとんど見当たらないのが現状である。

このように育児をしながら就労している女性に関する実証的な研究が少ない理由として、まず、育児期に就労する（特にフルタイムで働く）母親の少なさが挙げられる。日本ではM字型労働力率が示すように、育児期に就労する女性は少なく、仕事を継続する母親は全体の3割程度と相対的に少ない（厚生労働省 2004）。またフルタイムで働く母親は、育児にかかわる時間が少ないこともあり、育児感情の研究よりもむしろ、仕事と子育ての両立の問題や、夫婦関係において共働きであることの問題などが注目されることが多い。さらに社会的に問題となっている育児不安や育児ストレスなどの子育てへの否定的な感情が、専業主婦に顕著にみられることも原因と考えられる。働きながら子育てをする女性には特有の問題があると考えられるが、そのような問題は、ほとんど検討されていない。子育てをしながら働く女性の数が少ないために、問題視されにくくなっているのではないだろうか。

このように、働く母親の育児感情の実証的な研究は、国内ではほとんど行われていない。しかし、今後は働く母親の増加が予想されるため、そのような研究に対する社会的必要性は高まるだろう。前述のように、育児感情と検討されてきた就労に関する要因は、単純な就労形態を変数として取り上げる分析がほとんどであり、働く女性の心理的側面までを扱い、詳細に検討した研究はほとんどみられない。

母親の就労に対する感情や就労形態は多様である。働く動機についても、本人の希望や家族の反対、仕事に対する思い入れや、仕事の満足感等によって異なる。また、職種、労働時間、雇用形態、賃金といった就労形態など、母親の就労に関する問題は多岐に渡り、程度の差も大きい。さらに子育てをしながら働くことに対する抵抗感も、それまでの生育歴などにより異なるだろう。したがって母親の就労形態を従来のように「就労している母親」という枠組みでのみ検討することは、その心理的背景を正確に捉えているとはいえない。そこで本研究では、まだ手のかかる幼い子どもを持ちながら働く女性に注目し、育児生活に対して抱く感情や子育てへの態度について、母親自身の特徴と家族関係という視点から検討する。家族関係という視点から分析する理由としては、先行研究において、女性が仕事を継続するために働く心理的変数として、夫や義理の親が賛成していたかがきわめて重要な要因として影響していたことがあげられる（柏木ら 2003）。また、働きながら子育てをする際の心理的葛藤の要因として、実の母のありようが影響してくるため（直井 2000, Berg 1986）、働く母親にとって、家族に関する心理的変数が重要な意味を持つと考えられるためである。

さらに本研究では、育児への感情だけではなく、育児行為についても質問している。近年の虐待の増加など、子どもに手をあげることや、感情的にあたるような否定的な育児行為が増加傾向にある様

子がうかがえる。働く母親においても、このような育児行為は予想されるが、どのような要因と関連しているのか、詳細に検討したい。

働いている女性の育児への態度・感情に関連する変数として、まず社会経済的属性との関連を検討する。子育てをしながら働くためには、親と同居あるいは近居であれば、就労しやすいことは、従来から指摘されているが、親のサポートは道具的なサポートとしては有効であるが、子育てで感情や態度を左右するものであるかどうかは明らかにされていない。また収入や学歴など、これまで育児感情との関連が指摘されてきた社会経済的属性変数についても検討する。

なお、本研究において幼児を持つ親を対象としたことには、子育てへの感情や態度が幼児を持つ母親に強いことが挙げられる。特に乳幼児の母親は子どもに関わる時間が大きいため、仕事と家庭の問題に関心が高く、幼い子どもを持ちながら働く母親の心理的葛藤は大きいと考えられることからである。

さらに働く母親であっても、子育てと両立しやすいパートタイム労働者とフルタイム（正社員・常勤）とでは、その心理的意味が異なることが考えられる。したがって本研究ではフルタイム就労している母親に限定し、フルタイム就労の母親の育児への態度・感情を検討し、夫の価値観や子育て、実母の就労との関連について検討する。

先述のように、育児期に専業主婦となり、子育てに専念することが、必ずしも心理的に満足できないことについては研究が進んでいるが、フルタイムで働く母親であっても、女性の属性や家族からの影響により、子育てに対する感情もさまざまであろう。そのような女性たちの特徴を明らかにして育児感情との関連を検討することで、フルタイムで働く女性がどのような感情を抱えながら子育てしているのか、そして、どのような要因が育児感情に関連しているのかを明らかにすることを目的とする。

方 法

1. 調査対象 埼玉県にある幼稚園、保育園に在籍する3歳、4歳の幼児の母親と父親を調査対象とした。調査は2002年11月に行われた。園児の父親と母親用の調査用紙を、それぞれに返信用封筒を添付して配布し、後日園児を通して回収した。配布数は2,887組であり、母親の回収数は1,366名であった。母親の有効回答率は、園により多少の差はあるが、47.3%であった。現在の就労形態は、フルタイム就労者617名（45.1%）、パートタイム就労者479名（35.1%）、専業主婦264名（19.3%）である。本研究は、フルタイム就労女性の育児感情を分析することを目的とするため、分析対象者はフルタイム就労の母親（617名）とする。分析対象者の社会経済的属性は表1の通りである。なお、親との居住状況は、親が片道1時間以上の距離に居住している者を「親遠距離群」、1時間未満を「親近居群」、同一の住居あるいは敷地内に居住している場合を「親同居群」とし、それぞれの親のうち距離が最も近い親との居住状況により分類している。

表1 分析対象者(フルタイム就労の母親)の属性(617名)

平均年齢(歳)	34.1	(SD 4.4)
1週間あたりの平均労働時間(時間)	39.8	(SD 9.6)
母親の学歴		
中学卒	12	(1.9)
高校卒	162	(26.3)
専門学校卒	147	(23.8)
短大卒	132	(21.4)
大学卒	149	(24.1)
大学院卒	12	(1.9)
不明	3	(0.5)
親との居住状況		
親同居群	94	(15.2)
親近居群	306	(49.6)
親遠距離群	108	(17.5)
その他	109	(17.7)

()内は%

2. 調査内容

(1) 母親の職業と生活意識調査

「(妻の)職業および生活意識に関する調査」と題して、以下のような内容の調査を夫婦に行った。妻への調査は、現在の育児への態度・感情(20項目)、現在の生活感情(22項目)、学卒後から現在までの職経歴とライフイベント及び現在の就労形態、就労への態度(42項目)、実母の就労形態とその評価(2項目)、夫の家事・育児へのかかわりとその評価(8項目)、ソーシャル・サポート(6項目)、フェイスシートである。夫への調査は妻の就労への態度(16項目)、現在の生活・家族に対する感情(40項目)、育児休業制度に対する感情(10項目)、自分の家事・育児へのかかわりとその評価(8項目)、妻の生活感情の推測(10項目)、フェイスシートである。

本研究では、このうち妻が回答した現在の育児への態度・感情(20項目)、現在の就労形態、就労への態度(42項目)、実母の就労形態とその評価を中心に分析を行った。本研究で使用した「育児への態度・感情」尺度について説明する。

(2) 育児への態度・感情尺度

この20年ほど、親の育児に関する研究は蓄積され、近年では、育児不安や育児ストレスという言葉も浸透し、育児には不安やストレスがつきものであるという知見は、もはや一般化されている。近年、誰もが子育ての難しさを口にし、子どもを育てることをあえて選択しないものも少なくない。子育てが難しくなっているといわれ、育児には「ストレスや不安、制約感といった否定的な感情を抱きやすい。さらに近年の少子化により、1人の子どもを大切に育てる風潮もあり、子育ては失敗できないものというプレッシャーも感じやすいものである。他方、子育ては否定的な感情ばかりではなく、ほとんどの親が親であることから得られる喜びや満足感のような肯定的な感情をもって子育てをしていることも示されている。

本研究では、このような子育てに関する感情や態度を測定する育児への態度・感情項目を作成した。項目の作成に先立って、育児期女性 23 名に詳細な半構造化面接調査を行い、語られた内容から育児への態度・感情として有意義と判断された 20 項目が選定された。各項目について 4 段階（「とてもあてはまる（4 点）」から「まったくあてはまらない（1 点）」で評定を求めた。

（3）就労への態度尺度

結婚・出産を経る中で、仕事をやめた頃あるいはやめるかどうか迷った頃の状況を質問している。女性自身の職業や家族に関する価値観、女性が働くことに対する夫や親族の価値観、女性自身の職場環境、保育環境、経済的事情を質問しており、過去の気持ちや状況を思い出して回答する方法である。思い出す時点はそれぞれの状況により異なり、退職した女性には退職した頃のことを、継続している女性にはやめるかどうか最も迷った頃のことを、もし何度も退職した場合には、最も長く就いた仕事または思い入れの強かった仕事をやめた頃のことを、迷うことなく継続した女性には第 1 子出産頃のことを思い出して、回答するものである。各項目について 4 段階（「とてもあてはまる（4 点）」から「まったくあてはまらない（1 点）」で評定を求めた。

結果と考察

1. 育児への態度・感情について

（1）育児への態度・感情項目の因子分析結果

育児への態度・感情 20 項目について主因子法による因子分析を行い、スクリープロットと因子の解釈可能性を考慮して 3 因子を抽出した。¹⁾ 因子間に相関があることが予想されたため、因子軸の回転には斜交回転（プロマックス法）を用い、結果の解釈には因子パターン行列を適用した。次に項目を精選するため、それぞれの因子において負荷量が .40 未満の項目 5 項目を削除し、残った項目について因子分析を行ったところ、表 2 に示すような結果を得た。

第 1 因子は、「子どもに感情的にあたる」、「子どもへの接し方に反省が多い」といった項目に負荷量が高く、子育てに対する否定的な態度・行動と解釈できることから <育児に対する否定的な態度> と命名した。第 2 因子は、「子どもの成長に喜び」や「充実感」を感じるといった項目に負荷量が高く、子どもを育てることに喜びや充実感を感じていると解釈できることから <育児の喜び・充実感> と命名した。第 3 因子は、「よい子に育て上げるストレス」、「ほかの子とつい比較する」といった項目に負荷量が高く、よい子に育ててもらわないと困るというプレッシャーを感じると解釈できることから <良い育児への重圧> と命名した。アルファ係数は、第 1 因子が .741、第 2 因子が .715、第 3 因子が .671 であり、尺度の信頼性は十分高いといえよう。以下の分析では、各因子の粗点の合計を項目数で割った得点を、各因子の得点とする。

次に各因子の平均値を表 3 に示す。<育児の喜び・充実感> は平均値が高く、多くの女性が、子育ての喜びや充実感を感じている様子がうかがえる。他方、<育児に対する否定的な態度> の平均値も 2.77 と高くなっており、育児における否定的な態度が示されている。

また因子間相関を検討すると、<育児に対する否定的な態度> と <良い育児への重圧> との間の中

程度の正の相関がみられ ($r = .644$), 良い子育てをしなければというプレッシャーと否定的な態度は関連していることが示唆される。また<育児の喜び・充実感>と<育児に対する否定的な態度>, <良い育児への重圧>との間にはそれぞれ中程度の負の相関がみられ ($r = -.443$, $r = -.320$), 育児に対する肯定的な感情は, 子育てのプレッシャーや否定的な態度と負の関係にあることが示唆される。

表2 「育児への態度・感情」項目の因子分析結果

表2 「育児への態度・感情」項目の因子分析結果			
< 育児に対する否定的な態度 >			
自分の気分で子どもに感情的にあたる	.811	-.019	-.133
子どもに対する日々の接し方で反省することが多い	.690	.135	-.001
子どもに自分の都合をおしつけている	.579	-.005	-.041
子どもが言うことをきかないと、思わず手がでることがある	.576	-.085	-.084
子どもに注意すれば逆効果だと思いながら、つい言ってしまう	.558	.100	.110
< 育児の喜び・充実感 >			
子どもの成長に最も喜びを感じる	.080	.713	.060
親であることに充実感を感じる	.001	.653	.043
子どものことがかわいくて仕方がない	-.009	.640	.014
子どもを通して世界が広がるのが嬉しい	.090	.497	.012
子どもと一緒にいるとうんざりすることがある	-.190	.462	-.099
< 良い育児への重圧 >			
よい子に育て上げねばならないとストレスを感じる	.186	-.060	.750
子どものささいな言動が気になって仕方がない	.296	-.122	.527
ほかの子と自分の子をつい比べてしまう	.195	-.074	.505
子どもがちゃんとしてくれないと、私が困る	.292	-.172	.489
因子間相関			
	-.443	.644	
		-.320	

は逆転項目

表3 「育児感情」各因子の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
育児に対する否定的態度	2.77	0.51
育児の喜び・充実感	3.21	0.47
良い育児への重圧	2.16	0.48

(注) 評定範囲はすべて1~4である。

(2) フルタイム就労女性の「育児への態度・感情」と社会経済的属性との関連

「育児への態度・感情」とフルタイム就労女性の社会経済的属性との関連を, 女性の学歴, 親との居住状況と収入を取り上げて検討した。

まず, 学歴による分析であるが, 「中学・高校卒」, 「短大・専門学校卒」, 「大学・大学院卒」の3群を独立変数とし, 育児への態度・感情の3次元を従属変数とする分散分析及び Tukey 法による多重比較を行った。その結果, < 育児に対する否定的な態度 > に有意な差がみられた ($F(2, 599) = 5.36$, $P < .01$)。中学・高校卒の女性は, 大学・大学院卒の女性よりも育児に対する否定的な態度を取りやすいことが示されている。他方, < 育児の喜び・充実感 >, < 育児に対するプレッシャー > には有意な

差が見られなかった ($F(2,603) = 2.91, P > .10$), ($F(2,603) = 1.38, P > .10$)。フルタイム就労女性の学歴と育児への態度・感情を検討したところ、育児への否定的態度は学歴に関連しており、学歴の低いものが育児への否定的態度を取りやすい様子が示されている。

表4 学歴による育児感情得点と分散分析結果 (F値)

		平均値	(SD)	F値	多重比較
育児に対する 否定的態度	中学・高校卒 (n=168)	2.85	(0.50)	5.36 **	中・高卒 > 大・大学院卒
	短大・専門学校卒 (n=275)	2.78	(0.49)		
	大学・大学院卒 (n=159)	2.67	(0.53)		
育児の 喜び・充実感	中学・高校卒 (n=171)	3.15	(0.50)	2.91	
	短大・専門学校卒 (n=276)	3.23	(0.46)		
	大学・大学院卒 (n=159)	3.23	(0.45)		
良い育児への 重圧	中学・高校卒 (n=173)	2.19	(0.51)	1.38	
	短大・専門学校卒 (n=274)	2.17	(0.45)		
	大学・大学院卒 (n=159)	2.11	(0.50)		

**p<.01

次に、親との居住形態による分析を行った。親との居住形態は、「親と同居群」、「親と近居群」、「親と遠距離群」の3群を独立変数とし、育児への態度・感情の3次元を従属変数とする分散分析及びTukey法による多重比較を行った。その結果、親との居住状況による有意な差はみられず、育児に対する否定的態度 ($F(2,497) = .390, p > .10$)、 $<$ 育児の喜び・充実感 $>$ ($F(2,501) = .805, p > .10$)、 $<$ 良い育児への重圧 $>$ ($F(2,501) = .329, p > .10$)、フルタイム就労しながら子育てをしている女性の育児への態度・感情は、親と遠距離、同居、近居という居住形態による関連は見られないことが示された。では、自分の親と夫の親との距離による差異により、育児への態度・感情には差異はみられるのだろうか。親との距離による居住形態は「(両方の)親遠距離群(n=108)」、「夫の親と同居・近居群(夫の親と同居あるいは近居)(n=114)」、「妻の親と同居・近居群(自分の親と同居あるいは近居)(n=140)」の3群を独立変数とし、育児への態度・感情の3次元を従属変数とする分散分析及びTukey法による多重比較を行った(表5)。その結果、 $<$ 育児に対する否定的態度 $>$ に有意な差がみられ ($F(2,355) = 3.13, p < .05$)、夫の親と同居あるいは近居の場合は、自分の親と同居あるいは近居の場合に比べて、育児に対する否定的態度を取りやすいことが示された。

働きながらの子育ては、親と同居あるいは近居の場合、道具的サポートとして親が機能することが指摘されるが、子育てに対する態度や感情の側面としては、同居や別居という差異よりも、夫と妻どちらの親と距離が近いかに関連していることが示された。フルタイムで就労している女性の場合、夫の親と同居・近居の状態のほうが、自分の親が同居・近居である場合よりも、子育てへの否定的態度を取りやすい。夫との親と同居・近居の女性は、親が遠距離の女性よりも有意差はないが、子育てへの否定的態度の平均値が高くなっている。このことから、仕事と子育ての両立に効果的とされる親との同居や近居が、子育てへの態度については、夫の親との距離が近い場合について、逆効果となる可能性が示された。

表5 親との居住形態による育児感情得点と分散分析結果 (F値)

		平均値	(SD)	F値	多重比較
育児に対する 否定的態度	親遠距離 (n=107)	2.73	(0.52)	3.13 *	夫の親と同居・近居 > 自分の親と同居・近居
	夫の親と同居・近居 (n=111)	2.86	(0.46)		
	自分の親と同居・近居 (n=140)	2.71	(0.49)		
育児の 喜び・充実感	親遠距離 (n=107)	3.18	(0.47)	0.83	
	夫の親と同居・近居 (n=114)	3.26	(0.42)		
	自分の親と同居・近居 (n=140)	3.21	(0.44)		
良い育児への 重圧	親遠距離 (n=108)	2.19	(0.51)	0.98	
	夫の親と同居・近居 (n=113)	2.17	(0.45)		
	自分の親と同居・近居 (n=139)	2.11	(0.44)		

*p<.05

また、収入により、育児への態度・感情に差異がみられるのかを検討するため、女性の収入と子育てへの態度・感情の相関を検討した。その結果、女性の収入により、育児への態度・感情に有意な相関はみられなかった<育児に対する否定的態度> ($r = -.040, p > .10$), <育児の喜び・充実感> ($r = .004, p > .10$), <良い育児への重圧> ($r = .041, p > .10$)。また、世帯年収による分析を行った結果も同様であり<育児に対する否定的態度> ($r = -.003, p > .10$), <育児の喜び・充実感> ($r = .040, p > .10$), <育児に対するプレッシャー> ($r = .074, p > .10$), 妻の収入や世帯の収入と育児への態度・感情との間には顕著な関連は見られない。

2. フルタイム就労女性の「育児への態度・感情」と夫や夫の親の妻就労への賛否との関連

これまで、フルタイム女性の育児への態度・感情と社会経済的属性との関連を検討してきたが、次に女性を取り巻く家族の要因について検討する。これまでの研究により、女性が就労を継続するためには、夫や夫の親の賛成が重要な要因となっていることが明らかにされているが(柏木ら 2003)、夫や夫の親の妻就労に関する考えが、妻の育児への態度・感情に関連しているのだろうか。就労への態度尺度²⁾の<夫や夫の親の妻就労への反対>('夫は結婚したら(子どもが生まれたら)、私が仕事をやめるものだと思っていた','夫の親は私が働くことに反対だった'など)の得点について、就労への反対群と賛成群の2群に分け、育児への態度・感情の3次元を従属変数とするt検定を行った(表6)。その結果、<育児の喜び・充実感>に有意な差がみられ、夫や夫の親が就労に賛成している女性は、育児の喜びや充実感を感じやすいことが示された。他方、<良い育児への重圧>に有意傾向がみられ、夫や夫の親が就労に反対している場合、良い育児をしなければいけないというプレッシャーが大きくなり、賛成している場合、育児へのプレッシャーが低くなる傾向にあることが示された。フルタイムで就労している女性の育児への感情・態度は、夫や夫の親が自分の就労に賛成しているのか、反対しているのかによって、左右されることが示唆された。

表6 夫や夫の親の妻就労への反対と女性の育児感情得点のt検定結果

		平均値	(SD)	t値
育児に対する 否定的態度	賛成群 (n=201)	2.74	(0.53)	-1.24
	反対群 (n=125)	2.82	(0.54)	
育児の 喜び・充実感	賛成群 (n=202)	3.30	(0.45)	2.92 **
	反対群 (n=127)	3.14	(0.49)	
良い育児への 重圧	賛成群 (n=204)	2.09	(0.49)	-1.96 †
	反対群 (n=127)	2.20	(0.49)	

† p<.10, **p<.01

3. フルタイムで働く女性の「育児への態度・感情」と実母の就労との関連

フルタイムで働く母親の育児への態度・感情には、自分の母親の自分に対する子育てが関連していることが考えられる。特に女性は、職業やライフコースを選択する際に、自分の親の影響を受けやすい(伊藤1997)。では働く母親の場合、育児への態度・感情は自分の母親との就労形態とは関連しているのだろうか。現在の就労形態と幼児期の実母の就労形態については、表7の通りである。なお、フルタイム女性との比較の参考として、専業主婦女性の結果についても示している。²検定の結果、有意傾向がみられており、フルタイム就労・専業主婦という現在の就労形態について、実母の就労形態と関連している傾向がみられているが、顕著な関連とはいえない。

表7 実母の就労形態

現在の就労形態	幼児期の実母の就労形態	N	%
フルタイム就労 (N=605)	フルタイム	123	(20.3)
	専業主婦	210	(34.7)
	パートタイム・内職等	272	(45.0)
専業主婦 (N=254)	実母フルタイム	37	(14.6)
	実母専業主婦	83	(32.7)
	パートタイム・内職等	134	(52.7)

²検定 P<.10

現在フルタイム就労の女性について、実母の就労形態と異なる場合では、実母と自分の子育てへの関わり方に差異があり、子育てに影響を及ぼすのではないだろうか。つまり、実母が専業主婦であった場合には、実母と異なり自分はフルタイム就労していることに対して、葛藤を感じ、育児への態度・感情が良好ではないと考えられる。したがって、自分が幼児期に実母が専業主婦あるいはフルタイム就労であったかという実母の就労形態と、子育てへの態度・感情との関連を検討する。フルタイム就労の母親について、幼児期の実母の就労形態を独立変数とし、育児への態度・感情を従属変数とするt検定を行った。その結果、母親が専業主婦あるいはフルタイム就労であったかどうかという実母の就労形態は、現在フルタイム就労の女性の子育てへの態度・感情には関連していないことが示された<育児に対する否定的態度>(t(325)=0.004, p>.10), <育児の喜び・充実感>(t(328)=1.481, p>.10), <良い育児への重圧>(t(329)=0.293, p>.10)。

4. フルタイムで働く女性の「伝統的家族観」と実母の就労への評価との関連

実母の就労形態との差異は、フルタイム女性の育児への態度・感情には関連せず、実母の就労形態と現在の自分の就労形態との差異は、子育ての行動及び感情に顕著な関連は見られないことが示された。しかし、幼児期の実母の就労形態への評価と、自分の就労形態との間に葛藤が感じられる場合、そのような葛藤の有無が、育児への態度・感情に関連してくるのではないだろうか。

したがって、実母の就労形態と自分の就労形態との間に葛藤を抱えやすい者と抱えにくい者に分け、育児への態度・感情との関連を検討する。幼児期の実母の就労形態について、専業主婦とフルタイム就労であったものを抽出し、さらにその就労形態（実母が専業主婦・フルタイム就労であったこと）を肯定的に評価している女性（「自分もそうしたいと思っていた」に回答したもの）と、否定的に評価している女性（「自分はそうしたいと思っていなかった」に回答した女性）を組み合わせ、4群に分類した。つまり、「専業主婦だった母親を肯定している群」、「専業主婦だった母親を否定している群」、「フルタイムだった母親を肯定している群」、「フルタイムだった母親を否定している群」の4群である。ここで、フルタイム就労しながら幼児を育てている女性にとって、この4群は、女性自身のライフコースに葛藤を抱えやすい群と抱えにくい群に分類できる。つまり、「専業主婦だった母親を肯定している（ $n=42$ ）」あるいは「フルタイム就労だった母親を否定している（ $n=47$ ）」女性は、実母の就労形態への評価と現在の自分の就労状況との間の矛盾により、葛藤を抱えやすい。他方、「専業主婦だった母親を否定している（ $n=154$ ）」あるいは、「フルタイムの母親を肯定している（ $n=74$ ）」女性は、実母の就労形態への評価と現在の自分の就労状況との間の矛盾が少ないこともあり、現在の状況に葛藤を抱えにくいと考えられる。したがって、幼児期の実母の就労形態への評価と自分の就労形態に対する「葛藤が少ない（葛藤低）群」と「葛藤が大きい（葛藤高）群」の2群に分類される。

ここで「葛藤低群」と「葛藤高群」の特徴について検討する。この2群について結婚や出産を経る過程での仕事や家庭に対する価値観や状況を質問した「就労への態度」尺度²⁾の6次元についてt検定を行ったところ、<伝統的家族観> ($t(306)=-9.43, p<.001$)、<継続への動機> ($t(306)=2.72, p<.01$)、<自立志向> ($t(306)=3.35, p<.01$)に有意な差がみられている。このことは、「葛藤高群」は「葛藤低群」に比較して伝統的家族観が強く、仕事を継続したいという気持ちや、自立して働きたいという気持ちが弱かったという特徴を示している。

次に、実母の就労形態への評価と自分の就労形態との葛藤の有無が、育児への態度・感情に関連しているのかを検討するため、「葛藤低群」と「葛藤高群」の2群を独立変数に、育児への態度・感情を従属変数とするt検定を行った（表8）。その結果、<育児の喜び・充実感>に有意な差がみられ ($t(313)=2.32, p<.05$)、<育児に対するプレッシャー>には有意な傾向がみられた ($t(313)=-1.92, p<.10$)。このことから、実母の就労への葛藤がある女性は葛藤が少ない女性に比べて、育児の喜びや充実感が低く、育児に対するプレッシャーを感じやすい傾向が示された。

表8 実母の就労形態への葛藤による育児感情得点のt検定結果(フルタイム女性)

		平均値	(SD)	t値
育児に対する 否定的態度	葛藤低群 (n=225)	2.70	(0.52)	-1.58
	葛藤高群 (n=88)	2.80	(0.47)	
育児の 喜び・充実感	葛藤低群 (n=226)	3.28	(0.46)	2.32 *
	葛藤高群 (n=89)	3.14	(0.48)	
良い育児への 重圧	葛藤低群 (n=226)	2.09	(0.45)	-1.92 †
	葛藤高群 (n=89)	2.20	(0.47)	

†p<.10, *p<.01

他方、専業主婦の女性は、母親の就労形態との葛藤により、差異はみられるのだろうか。専業主婦についても同様に、「専業主婦だった母親を否定している (n=41)」あるいは、「フルタイムの母親を肯定している (n=12)」女性は、実母の就労形態に対する評価と現在の自分の就労状況との間の矛盾により葛藤を抱えやすく、「専業主婦だった母親を肯定している (n=37)」あるいは「フルタイム就労だった母親を否定している (n=25)」女性は、実母の就労形態に対する評価と現在の自分の就労状況との間の矛盾が少ないこともあり、現在の状況に葛藤を抱えにくいと考えられる。

ここで専業主婦の「葛藤低群」と「葛藤高群」の特徴について検討する。この2群について仕事をやめた頃の仕事や家庭に対する価値観や状況を質問した「就労への態度」尺度²⁾の6次元についてt検定を行ったところ、< 伝統的家族観 > (t(112)=4.27, p<.001), < 継続への動機 > (t(111)=-3.29, p<.01) に有意な差がみられた。このことは、「葛藤低群」は「葛藤高群」に比較して伝統的家族観が強く、仕事を継続したいという気持ちが弱かったという特徴を示している。

次に、幼児期の実母の就労形態への評価に対する「葛藤が少ない(葛藤低)群」と「葛藤が大きい(葛藤高)群」の2群を独立変数とし、育児への態度・感情を従属変数とするt検定を行った(表9)。その結果、専業主婦においては実母の就労形態への評価との葛藤について、有意な差異は見られなかった。

表9 実母の就労形態への葛藤による育児感情得点のt検定結果(専業主婦女性)

		平均値	(SD)	t値
育児に対する 否定的態度	葛藤低群 (n=61)	2.91	(0.52)	0.58
	葛藤高群 (n=52)	2.85	(0.47)	
育児の 喜び・充実感	葛藤低群 (n=62)	3.15	(0.46)	1.06
	葛藤高群 (n=53)	3.05	(0.48)	
良い育児への 重圧	葛藤低群 (n=62)	2.37	(0.45)	1.07
	葛藤高群 (n=53)	2.27	(0.47)	

フルタイム就労女性については、実母の就労形態への評価と自分の就労形態との葛藤により、育児への態度・感情に差異が見られているが、専業主婦女性については、顕著な差異は見られていない。このことにより、フルタイム女性については、実母の就労形態への評価と自分の就労形態との葛藤の有無が育児感情に関連しているといえよう。

全体的考察と今後の課題

本研究は、幼児を育てながらフルタイムで働く母親の育児への態度・感情に注目し、その構造と社会経済的屬性及び夫や夫の親、実母等家族に関する変数との関連について検討した。これらの分析の結果から、主に以下の4点が明らかにされた。

1. 育児への態度・感情について

本研究から得られた第1の成果は、育児への態度・感情の構造において<育児に対する否定的態度>、<育児の喜び・充実感>、<良い育児への重圧>の3次元が見出されたことである。なお、育児への態度・感情の分析については、フルタイムの母親だけではなく、全回収サンプルを分析した結果である。幼児の親の育児感情には、喜びや充実感という肯定的な感情がある反面、良い子に育てなければというプレッシャーが感じられるものであることが明らかにされた。さらに、良い育児への重圧は、育児に対する否定的な態度と関連しており、育児にプレッシャーを感じてしまうことが、子どもに手をあげたり、感情的に叱ってしまうことに関連している様子が示された。現代は少子化がいつそう進んでいることもあり、多くの子どもを育てる女性は減少している。このような少子化により母親は子育てに失敗してはいけないと、良い子育てに対して敏感になりやすい傾向にある。このような育児に対するプレッシャーが子どもへの否定的な態度に関連していることは、現代の母親の子育てをより困難なものにしている様子がうかがえる。さらにこのような感情は、育児の喜び・充実感と負の関係にあり、否定的な子育て行動や育児感情は、育児の喜び・充実感といった肯定的な感情と負の関連があることが示された。

2. 育児への態度・感情に関連する社会経済的屬性について

第2の成果は、フルタイム就労の母親の育児への態度・感情に関連する社会経済的屬性について明らかにされたことである。社会経済的屬性としてまず、学歴との関連を検討したが、子育てへの否定的な態度のみが学歴と関連していた。親との居住状況による差異を検討したところ、育児への態度に関連がみられ、夫の親との距離が近い母親は、自分の親との距離が近い母親よりも、育児への否定的な態度を取りやすいことが示された。親と同居あるいは近くに住むことにより、仕事と子育ての両立はしやすいかもしれないが、夫の親との距離が近い場合、自分の親との距離が近い場合よりも否定的な育児態度を取りやすくなり、義理の親との物理的な距離が近いことにより良好な育児態度を取りにくくなる可能性が示唆された。

3. 夫や夫の親の妻就労への賛否と育児への態度・感情との関連について

第3の成果は、フルタイム就労の母親の育児への態度・感情には、夫や夫の親からの就労に対する賛否や実母の就労に対する評価が関連していることが示されたことである。このことは、夫や夫の親にフルタイムで働く状況を理解してもらい、就労を応援してもらえという関係を築いていることが、良好な育児感情や育児行為には重要であることを示しており、改めて女性が働きながら子育てをする

際に、夫や夫の親の理解が重要であることが明らかにされた。

4. 実母の就労形態への評価と自分の就労形態との葛藤について

第4の成果は、幼児期の実母の就労形態への評価と自分の就労形態との葛藤の有無が、育児への態度・感情に関連していることが明らかにされたことである。フルタイム就労している女性は、幼児期に実母が専業主婦であったかフルタイム就労であったかということは、育児感情や育児への態度に関連してはいない。しかし、幼児期の母親の就労形態への評価と、現在の自分の就労形態との間に矛盾があり、葛藤を感じる時、そのことが育児への態度・感情に関連してくるのである。例えば、幼児期に母親が専業主婦であり、そのことに肯定的な評価をしていながらも、自分はフルタイムで働いているという、自分のライフコースに葛藤を感じやすい女性は、育児への重圧を感じやすく、喜び・充実感も得にくい。他方、幼児期に母親が専業主婦であり、そのことに否定的な評価をしているなど、フルタイムで働くことに葛藤の少ない女性は、育児への重圧が小さく、喜び・充実感も得やすい。

フルタイム女性の育児への態度・感情は、幼児期の実母の就労形態との直接的な関連はないが、実母の就労形態への評価と自分の就労形態との葛藤が重要であり、葛藤がある場合、子育てのプレッシャーが強くなり、子育てを楽しめなくなるという関係にあることが明らかにされた。これまで、実母のライフコースが、女性のライフコースに少なからず影響を及ぼすことは指摘されてきたが、フルタイム就労している母親たちは、実母の就労形態ではなく、そのような就労形態に対する評価と自分が働いている状況との葛藤が、子育てに関連しているといえよう。自分が幼い頃の母親の就労形態への評価と現在の自分の就労形態に葛藤を抱える場合、母親のようにできない自分に対するジレンマから、育児を楽しめない、あるいは育児に対してプレッシャーを感じてしまう傾向にあるのではないだろうか。仕事と子育てを両立し、育児への態度・感情を良好にするためには、就労に対する感情や価値観を柔軟にし、実母の就労形態への評価からの葛藤を少なくしてゆくことが必要と考える。

5. 今後の検討課題

最後に今後の検討課題を述べる。本研究では、幼児を育てながらフルタイム就労している女性の育児への態度・感情に関連する変数の検討を行い、分析についてはフルタイム就労の母親を中心に行っている。しかし、否定的な育児感情を持ちやすいと指摘されることの多い専業主婦の母親について扱い、その育児への態度・感情についても検討する必要がある。今後は専業主婦に関して分析し、フルタイム就労の母親との比較をすることで、その特徴をより明らかにすることが必要である。

また、フルタイム就労の母親であっても、その就労条件は多岐にわたり、仕事の内容や労働・移動時間等さまざまである。今後は母親の職業の特徴により、さらに分析を深める必要性が考えられる。

さらに子育てに関連する変数に関しても、価値観やこれまでのライフコースなど、女性自身の仕事に対する考え方に差がみられる。そのような仕事や女性の特徴を細分化し、育児への態度・感情との関連を検討することにより、育児と仕事を両立している女性の特徴がさらに明らかにされると考えられる。今後はそのような分析を深め、働く女性が精神的に健康に子育てをするための示唆を得たいと考える。

<脚注>

¹⁾ 本稿の分析対象はフルタイム女性 617 名であるが、別稿において他の就労形態との比較を行うことを予定している。そのため、フルタイム就労していない女性にも共通する構造・次元を求めるべく育児への態度・感情の因子分析についてのみ、母親の全有効回答データ（1,366 名）を使用している。

²⁾ 「就労への態度」尺度は、<伝統的家族観><「継続への意志」><自立志向><夫や夫の親の妻就労への反対><夫の家事育児サポート><自分の親や周囲からの育児サポート>の 6 次元から成る。尺度の詳細については、埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）平成 14 年度共同研究「育児期女性の就労中断に関する研究」報告書（研究代表者 柏木恵子）に掲載。

引用文献

- Barbara J. Berg. (1986) *The crisis of the working mother*. New York: Georges Borchardt, Inc.
- 伊藤裕子. (1997). 高校生における性差観の形成環境と性役割選択: 性差観スケール (SGC) 作成の試み. *教育心理学研究*, 45, 396-404.
- 柏木恵子・平山順子・目良秋子・小坂千秋・平賀圭子・飯島絵理. (2003). 育児期女性の就労中断に関する研究. *With You さいたま 平成 14 年共同研究報告書*.
- 小泉智恵. (2004). 仕事と家庭のストレス. 糸井尚子・渡辺千歳(編). *発達心理学エッセイ*. 東京: 川島書店, 245-264.
- 小坂千秋. (2004). 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因: 就労形態からの検討. *発達研究*, 18.
- 厚生労働省. (2004). *出生前後の就業変化に関する統計: 人口動態統計特殊報告書*.
- 氏家達夫. (1996). *親になるプロセス*. 東京: 金子書房.
- 牧野カツコ. (1983). 働く母親と育児不安. *家庭教育研究所紀要*, 4, 67-76.
- 松信ひろみ. (2000). 就業女性にとっての職業と子育て - 「子育てよりも仕事」は本当か? 目黒依子 矢澤澄子(編). *少子化時代のジェンダーと母親意識*. 東京: 新曜社, 149-168.
- 直井道子. (2000). 家意識と祖母の子育て. 目黒依子 矢澤澄子(編). *少子化時代のジェンダーと母親意識*. 東京: 新曜社, 91-110.

< 付 記 >

本研究は、埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）平成14年度共同研究「育児期女性の就労中断に関する研究」（研究代表者 柏木恵子）において収集されたデータの一部である。他の共同研究者は平山順子（名古屋大学）、目良秋子（聖セシリア女子短期大学）、平賀圭子・飯島絵理（With You さいたま）である。

< 謝 辞 >

本調査にご協力くださいました園の先生方、お母様方に心よりお礼申し上げます。